

ヨハネ1 : 19-51

1:19 ヨハネの証言は、こうである。ユダヤ人たちが祭司とレビ人をエルサレムからヨハネのもとに遣わして、「あなたはどなたですか」と尋ねさせた。 1:20 彼は告白して否まず、「私はキリストではありません」と言明した。 1:21 また、彼らは聞いた。「では、いったい何ですか。あなたはエリヤですか。」彼は言った。「そうではありません。」「あなたはあの預言者ですか。」彼は答えた。「違います。」 1:22 そこで、彼らは言った。「あなたはだれですか。私たちが遣わした人々に返事をしたのですが、あなたは自分を何だと言われるのですか。」 1:23 彼は言った。「私は、預言者イザヤが言ったように『主の道をまっすぐにせよ』と荒野で叫んでいる者の声です。」 1:24 彼らは、パリサイ人の中から遣わされたのであった。 1:25 彼らはまた尋ねて言った。キリストでもなく、エリヤでもなく、またあの預言者でもないなら、なぜ、あなたはバプテスマを授けているのですか。」 1:26 ヨハネは答えて言った。「私は水でバプテスマを授けているが、あなたがたの中に、あなたがたの知らない方が立っておられます。 1:27 その方は私のあとから来られる方で、私はその方のくつのひもを解く値うちもありません。」 1:28 この事があったのは、ヨルダンの向こう岸のベタニヤであって、ヨハネはそこでバプテスマを授けていた。 1:29 その翌日、ヨハネは自分のほうにイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。 1:30 私が『私のあとから来る人がある。その方は私にまさる方である。私より先におられたからだ』と言ったのは、この方のことです。 1:31 私もこの方を知りませんでした。しかし、この方がイスラエルに明らかにされるために、私は来て、水でバプテスマを授けているのです。」 1:32 またヨハネは証言して言った。「御霊が鳩のように天から下って、この方の上にとどまられるのを私は見ました。 1:33 私もこの方を知りませんでした。しかし、水でバプテスマを授けさせるために私を遣わされた方が、私に言われました。『御霊がある方の上に下って、その上にとどまられるのがあなたに見えたなら、その方こそ、聖霊によってバプテスマを授ける方である。』 1:34 私はそれを見たのです。それで、この方が神の子であると証言しているのです。」 1:35 その翌日、またヨハネは、ふたりの弟子とともに立っていたが、 1:36 イエスが歩いて行かれるのを見て、「見よ、神の小羊」と言った。 1:37 ふたりの弟子は、彼がそう言うのを聞いて、イエスについて行った。 1:38 イエスは振り向いて、彼らがついて来るのを見て、言われた。「あなたがたは何を求めているのですか。」彼らは言った。「ラビ(訳して言えば、先生)。今どこにお泊まりですか。」 1:39 イエスは彼らに言われた。「来なさい。そうすればわかります。」そこで、彼らについて行って、イエスの泊まっておられる所を知った。そして、その日彼らはイエスといっしょにいた。時は第十時ごろであった。 1:40 ヨハネから聞いて、イエスについて行ったふたりのうちのひとは、シモン・ペテロの兄弟アンデレであった。 1:41 彼はまず自分の兄弟シモンを見つけて、「私たちはメシヤ(訳して言えば、キリスト)に会った」と言った。 1:42 彼はシモンをイエスのもとに連れて来た。イエスはシモンに目を留めて言われた。「あなたはヨハネの子シモンです。あなたをケパ(訳すとペテロ)と呼ぶことにします。」 1:43 その翌日、イエスはガリラヤに行こうとされた。そして、ピリポを見つけて「わたしに従って来なさい」と言われた。 1:44 ピリポは、ベツサイダの人で、アンデレやペテロと同じ町の出身であった。 1:45 彼はナタナエルを見つけて言った。「私たちは、モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている方に会いました。ナザレの人で、ヨセフの子イエスです。」 1:46 ナタナエルは彼に言った。「ナザレから何の良いものが出るだろう。」ピリポは言った。「来て、そして、見なさい。」 1:47 イエスはナタナエルが自分のほうに来るのを見て、彼について言われた。「これこそ、ほんとうのイスラエル人だ。彼のうちには偽りが無い。」 1:48 ナタナエルはイエスに言った。「どうして私をご存じなのですか。」イエスは言われた。「わたしは、ピリポがあなたを呼ぶ前に、あなたがいちじくの木の下にいるのを見たのです。」 1:49 ナタナエルは答えた。「先生。あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です。」 1:50 イエスは答えて言われた。「あなたがいちじくの木の下にいるのを見た、とわたしが言ったので、あなたは信じるのですか。あなたは、それよりもさらに大きなことを見ることになります。」 1:51 そして言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたはいまに見ます。」

先週、ヨハネの福音書の序論の中で、この福音書の主題がヨハネ20 : 30-31にあることがわかりました。

ヨハネは、私たちがイエス・キリストを信じ、信じることによってキリストの名にあるいのちを得るためにこの福音書を記しました。

ということは、あなたがイエスを信じているなら、イエスの名によって新しいいのちを得ることができるのです。

また、ヨハネ1：1-18にはいくつかのテーマが紹介されていました。これらのテーマについては、ヨハネの福音書の中で後ほど学んでいくことになります。

これらのテーマは、イエスがどのようなお方で、なぜ私たちがイエスを信じるべきなのかを明らかにしてくれます。

1. イエスはこの世の始まる前から存在しておられた。
2. イエスは、すべての暗闇を消し去るまことの光である。
3. イエス・キリストは、ご自身の民であるユダヤ民族のもとに来られたが、救いはユダヤ人にも異邦人にも提供されている。
4. クリスマンになるためには、神の御霊によって生まれ変わる必要がある。これは、私たち自身の決意や価値によるものではない。
5. ヨハネの福音書は、イエス・キリストの人生をとおして神の栄光を私たちに示してくれる。
6. ヨハネの福音書は、神の律法とイエス・キリストの恵みの違いを示してくれる。
7. ヨハネの福音書は、旧約聖書と新約聖書を関連付ける。

今日、私たちは旧約聖書と新約聖書の関連を明らかに見ることができます。

ヨハネは、イエス・キリストが長らく待ち望まれた救い主であると教えます。この救い主は、旧約聖書の中で預言者をとおして語られたお方です。

先ほど読んだヨハネ1：19-51の中で、重要なポイントが3つ示されています。

1. バプテスマのヨハネのイエスとの関係性(19-28節)
2. イエスがどのようなお方かに関するバプテスマのヨハネの証(29-36節)
3. イエスがご自身の神性をあらわし、最初の弟子たちをご自身のもとに導かれる(37-51節)

この箇所から、バプテスマのヨハネがどのような人物かを探るために、エルサレムから祭司やレビ人が遣わされたことがわかります。彼らがバプテスマのヨハネに関心を示した理由が、マタイ3章5節と7節に記されています。バプテスマのヨハネがあらゆる場所で群衆の注目を浴びていたからです。ユダヤ人は、バプテスマのヨハネの教えを聞き、洗礼を受けるために、ずいぶん長い道のりを旅したようです。バプテスマのヨハネは、レビ族でした。レビ族は、幕屋で神に仕える民として聖別され、後に神殿で神に仕えるようになりました。

ユダヤ人の指導者たちがバプテスマのヨハネにとくに興味を示した理由は、多くの人々が彼についていこうと集まっていたからです。

ユダヤ人指導者が、バプテスマのヨハネにどんな質問をしたかは記されていません。ここにあるのは、ヨハネの答えのみです。

ヨハネは、自分はキリストではないと言いました。

すると彼らは、ヨハネがエリヤかと尋ねました。ユダヤ人たちは、メシヤが来られる前に何らかの形でエリヤが現れると考えていたからです(マラキ4：5)。

さらに、「預言者」かと尋ねました。モーセのような預言者が約束されている申命記18：15-18のことを指していたのでしょう。

ユダヤ人指導者たちは、あてはまりそうなみことばの可能性をすべて考えたと思い、「あなたは誰でも。私たちを遣わした人々に返事をしたい。」と言いました。

バプテスマのヨハネは、イザヤ40：3のみことばを引用し、答えました。

この引用には深い意味があります。イザヤ書は、捕囚となった神の民への約束が数多く記されているからです。民は、いつまでも捕囚ではないという約束をいただきました。神がご自身の民を救い、元においた場所に帰らせてくださる時がくると約束します。救い主なる神が勝利者として来られる、このお方は同時に苦しみを受けるしもべであると語ります。

バプテスマのヨハネは、メシヤが来られる前に人々を整えることだけが自身の役割であると言います。

ユダヤ人指導者たちは、バプテスマのヨハネがメシヤでもエリヤでも預言者でもないなら、なぜ荒野で人々を洗礼するのかと、彼の働きについて疑問を呈しました。

ヨハネはこの問いに答えず、人々の注意を自身よりはるかに偉大なお方に向けます。彼は、そのお方のくつのひもを解く値うちも自分にはないと言います。

バプテスマのヨハネは、当時の社会通念に照らして、慎み深さを見せます。

当時の師弟関係において、生徒や弟子は師匠のために、奴隷がすべき仕事を何でもしましたが、ひとつ例外がありました。それは、汚れた履物を脱がせることでした。ヨハネはここで、このお方の履物のひもを解く値打ちも自分にはないと言っているのです。

バプテスマのヨハネのイエスとの関係性は、謙虚さという一言で表されます。これは、ここ OIC でイエスに仕える私たちが倣うべき模範です。

2. イエスがどういうお方であるかに関するバプテスマのヨハネの証(29-36節)

次にヨハネは、自分には履物のひもを解く値打ちもないと謙虚に話すお方について語ります。彼はこのお方を「世の罪を取り除く神の小羊。」(29節)と言いました。これはどういう意味でしょう。

この言葉を理解するには、ふたつのことを理解する必要があります。この世に生まれたすべての人間の罪深い性質と、この罪に対する神の対処方法です。この対処法については、旧約聖書に示されています。

創世記2-3章に、人類が罪深い性質となっただけが記されています。神は、完全な男を造られ、その男から女を助け手としてお造りになりました。ふたりは、神が創造された世界で、ひとつの条件を除いて何でもする自由を与えられていました。その条件とは、善悪の知識の木からは取って食べてはならないというものでした(創世記2：17)。もし従わなければ死ぬ、と神はおっしゃいました。それは、肉体の死に加え、ふたりが享受していた神との関係が断たれるという死も意味しました。残念ながら、アダムとエバはこの言いつけを守らず、肉体的にも霊的にも神から引き離されることになりました。彼らも地も呪われたのです。

神はふたりをあわれんで、ふたりの裸を隠す衣を与えようと、動物を殺されました(創世記3：21)。これは、人類の罪深さを覆うために神が動物を殺されたと初めて記されている箇所です。

罪の赦しのために動物が殺された話が次に登場するのは、創世記4章です。ここには、カインとアベルの話が記されています。

聖書を掘り下げて学ぶと、神がカインとアベルのふたりに語りかけ、動物を殺して祭壇にその血を注ぐように仰せられたことがわかります。祭壇は、いけにえがささげられる石のことです。

そんなことをするなど、考えただけでぞっとします。そのようにしなさいと神がおっしゃるのはどういう理由からでしょうか。

ヘブル9：22には、「血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。」とあります。

神は、人の罪という借りを返す、つまり赦されるには、死を要するとおっしゃるのです。けれども、なぜ血が流されなければならないのでしょうか。溺死ではだめなのではないでしょうか。

レビ記17：11「なぜなら、肉のいのちは血の中にあるからである。わたしはあなたがたのいのちを祭壇の上で贖うために、これをあなたがたに与えた。いのちとして贖いをするのは血である。」

血のいけにえのコンセプトにはふたつの側面があります。

まず、身代わりという意味合いです。通常、人は自分の罪のせいで死にます。しかし、将来起こる特定のできごとに基づいて、神は無垢な動物の死を人の代わりとして受け入れると言われました。つまり、身代わりの死です。いのちの引き換えにいのちがささげられるのです。罪のない動物が罪のある人間の代わりに死にます。神の義はこうして満たされます。神がおっしゃったとおり、罪は死をもって罰せられなければなりません。

血のいけにえのふたつめの側面は、あがないです。神は、血が罪をあがなうとおっしゃいました。あがなうとは、覆うという意味です。流された血潮が罪を覆うのです。こうして、神が人をご覧になっても、罪をご覧になることはなくなります。人は義と見なされ、神に受け入れられます。すると、神と人との関係が回復します。人の肉体は死にますが、永遠の罪の罰からは免れます。

旧約聖書では、神を礼拝するために幕屋や神殿にやってくると、罪をあがなうために動物がいけにえとしてささげられました。

さて、29節でバプテスマのヨハネが「世の罪を取り除く神の小羊」と呼んだ人物に話を戻しましょう。

通常、罪のない子羊が罪のいけにえとしてささげられます。しかし、ヨハネはここで、そのお方が神の小羊だと言います。つまり、旧約聖書で子羊がしたのと同じ役割をする人を神が与えてくださるということです。ただし、この小羊は人間で、この人は、世の罪を取り除くためにささげられるというのです。

動物の子羊は罪を覆う役割を果たしましたが、神の小羊は、罪を取り除かれるのです。なんとすばらしいことでしょう。罪のために動物をいけにえにする必要がなくなります。

バプテスマのヨハネは、このお方は世の罪を取り除く神の小羊であるだけでなく、信じる者に聖霊による洗礼を授けてくださるとも言いました。

ヨハネの福音書14：16、26には、イエスが弟子たちに聖霊を約束されたことが記されています。この約束は、降臨節に成就しました（使徒2章）。

しかし、聖霊についてはまた後日学ぶことにしましょう。

この来るべきお方について3つめの証言は、このお方が神の御子であるとバプテスマのヨハネに知らされたというものです。32節には、御霊が鳩のように天から下って、この方の上にとどまられるのをヨハネが見たと語ります。彼は、このようにしてそのお方が神の御子であると知ることができると神から教えられていました。34節で、ヨハネはこう言います。「私はそれを見たのです。それで、この方が神の子であると証言しているのです。」

ヨハネがイエスについて証言する3つの事柄をまとめてみましょう。

第一このお方は、世の罪を取り除く神の小羊である。

第二このお方は、聖霊による洗礼を施すお方である。

第三このお方は、神の御子である。

では次に、今日の個所の3つめのポイントに進みましょう。イエスがご自身の神性をあらわし、最初の弟子たちをご自身のもとに導かれたことです。

この部分で、バプテスマのヨハネの証言から、イエスの招きへと話に移ります。

ここに、ある原則が示されています。私たちはイエスについて証しますが、人をイエスのもとに招くのはイエスご自身です。

私たちは聖霊の働きをすることはできませんが、イエスの生き方と十字架上の御業について証することができます。人に自分の罪を気づかせるのは、聖霊のお働きです。

ヨハネ16：8はこう語ります。「その方（聖霊）が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。」

35-36節で、バプテスマのヨハネはふたりの弟子たちの前でふたたびイエスについて証言します。ここでもヨハネはイエスを「神の小羊」と呼びます。

するとすぐさま、ふたりはイエスについていきました。

ここで興味深いのは、イエスが「あなたがたは何を求めているのですか。」とおっしゃったことです。簡単に言うと、「何を探しているのか」または「何がほしいのか」となります。

最初の弟子となった人たちにイエスがまず尋ねられたのは、「あなたがたの心と思いの中にあるものは何か」という問いでした。

今日の世界では、間違った動機でイエスについていく人があまりにも多くいます。そういう人たちは、富と健康と繁栄を求めています。

こうした考えの問題は、その人たちが病気になったり、貧しくなったりすると、神に失望させられたと思ひ、イエスについていくのをやめてしまうことです。イエスは、私たちがなぜイエスについていくのかを自己吟味するよう求められます。私たちは自分の動機をイエスの召しに沿うよう合わせて行く必要があります。それは、どんな犠牲が伴っても、旅路が困難でも、すべてを捨ててイエスに従うことです。現在、過去、未来のすべての罪を赦され、天に永遠の家を与えられ、イエスと一対一のつながりを持てるなら、それで十分なはずで、病気でも、貧しくても、障害があっても、関係ないはずで、

ギリシャ語で読む人々のために、ヨハネはラビという単語を先生と訳しました。最初の弟子となったふたりの返答は、謙虚さとイエスへの尊敬に満ちたものでした。ふたりは正しい動機でイエスについていったのです。

アンデレは、バプテスマのヨハネとイエスの話を聞いた初めての弟子のひとりでした。彼はすぐに兄弟のシモンを見つけて、イエスを紹介しました。

イエスはシモンを見ておっしゃいました。「あなたはヨハネの子シモンです。あなたをケパ(訳すとペテロ)と呼ぶことにします。」

イエスが使われたと思われるアラム語の単語は「ケパ」で、これは岩という意味です。

シモン・ペテロは、なんどもイエスをはっきりさせるようなことをしてしまいましたが、最終的に、神の聖霊が彼を岩のような人にしてくださいました。イエスは、ペテロの心を知ってくださり、若い彼に隠された神に栄光を帰す可能性を知っておられました。

私たちが真心をこめてイエスについて行きたいと思うなら、主は私たちの人生を変えてくださるでしょう。私たちの生き方が神に栄光をもたらすためです。ペテロのように失敗することもあるでしょうが、多くの場合、失敗は霊の成長と発展のチャンスとなります。私たちには今のことしかわかりませんが、イエスは未来を見ておられます。このお方を信頼して人生を預けることができます。

イエスは私たちを知り、愛し、気にかけてくださいます。どんなこともイエスに委ねる人には、最善のものを与えてくださいます。

次に、イエスがガリラヤに行こうとなさったことがわかります。そこでイエスはピリポと出会われました。

ピリポはナタナエルをイエスに紹介しました。

ナタナエルはイエスがメシヤであることについて懐疑的でしたが、ピリポは「来て、そして、見なさい。」と言いました。

イエスは、ピリポがナタナエルを呼ぶ前にいちじくの木の下にいるのを見たと言って、ご自身が全知であることを示されました。

ここでナタナエルは、イエスを神の子、イスラエルの王と認めます。

イエスはナタナエルに答えて、ご自身が全知であることよりもさらに大きなことを見ると約束なさいました。

さらに大きなことのひとつの例を挙げて、天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを見つかる、とおっしゃいました。

イエスはなぜこんなことをおっしゃったのでしょうか。また、何について話しておられたのでしょうか。

これは、ヤコブの夢に登場する創世記28：12のイメージです。

弟子たちがいただいた約束は、彼らが認めたお方こそ神が選ばれたメシヤであるという天からの確証です。ユダヤ人は誰もがイスラエルの12部族の父祖であるヤコブを敬っていました。そして今、同じ神がイエスをメシヤとして選ばれたことをすべての人が認めなければなりません。

日本の OIC における今日の私たちにとって

私たちは、当時の人々と同じ方向性に沿って適用をしなければなりません。

まず、私たちはイエスについて、また長らく待ち望まれたメシヤの役割について、バプテスマのヨハネの言葉を聞く必要があります。イエスが来られた一番の目的は、私たちの罪に対処することだと覚えておきましょう。

次に、イエスは私たちの動機を探られることを知っておくべきです。イエスとともに歩む人生に、私たちは何を求めているのでしょうか。今週、ぜひ時間を取って、イエスについて行く動機について自分を省みてください。本当に求めているものは何でしょうか。それは、神があなたに持っておられるご計画と合致しますか。私たちの人生における神のご計画を知る最善の方法は、人生すべてを神に委ね切ることです。神がどこに導かれ、何を求められるかわからないのですから、もちろん簡単ではありません。けれども、どんなこともイエスに委ねる人には、最善のものを与えてくださいます。

私は28歳のときに、イエスに人生のすべてをおささげしましたが、1年半ほど前、神のご計画にちゃんと沿っていることを確認するため、神に改めて自分の人生をささげる必要性を感じました。神は今こうして、私を日本に連れ帰ってくださいました。

第三に、50節でイエスは、弟子たちの未来に大きなことが起こると約束されました。OICの交わりにも、イエスは大きなことを用意しておられるかもしれません。神がOICに用意されたことに自分たちを沿わせる覚悟はありますか。